鬼のかけ橋（柏原町）

昔その昔、鬼がすんでいました。
その鬼は、苦しい修行〈しゅぎょう〉をつんだため、ふしぎな術をつかうことができました。
大空をかけめぐることもできました。
大風をおこしたり、大雨をふらすことも、思いのままでした。
ある日、大空をかけめぐりながら、天上で天人たちがにぎやかに、さわいでいるのを見て、「おれも、あの天人たちと、友だちになりたい。」と天上の広場のまんなかに、とびあがりました。

「キャッ、鬼、鬼がきた。いやな鬼だあ。」と天人たちは、にげていってしまいました。
鬼は、かなしくなりました。そして、天人たちをうらみました。
「おぼえていろ、おまえたちの宝物をうばって、かなしめてやるぞ。」
それからの鬼は、大空をかけまわるたびに、天人どものすみかをおそっては、宝物をあつめました。
かなしむ天人たちをみて、いいきみだわいと、笑っていました。でも、一つだけ、困ることがありました。それは、うばいとった宝物をかくしておくところを、もっていなかったことです。
大空をかけまわっていた鬼は、丹波〈たんば〉の小倉の里によい倉のあるのを見つけました。
「天から、あの里におりるのには橋がいる。」と、金山の頂上に岩をくみあわせた橋をかけました。
それからは、この岩のかけ橋をわたっては、小倉の里の倉に、天人の宝物や天女までもはこびこんで、とじこめました。
「たすけてえ、天へかえしてえ。」と、倉の中で、なきわめく天女たちをみて、小倉の里人たちは、かわいそうになったので、鬼をたいじする方法を教えてもらいに都へいきました。

「鬼は、鐘〈かね〉の音をきくと、にげていってしまう。」と教えてもらった里人たちは、つり鐘をつくって鬼のかけ橋の見える坂のとちゅの桜の枝につりさげ、ゴーン、ゴーンと、つきだしました。
かけ橋のちかくまできた鬼は、その鐘の音をきくと、心がいたみ、足がふるえ、とうとうにげていってしまいました。
里人たちは、倉の戸をあけ、天女たちを宝物と共に、天上へおくりかえしてやりました。
鬼は大空のどこかで、かけ橋や鐘が坂や小倉の里のことを、想いだしていることでしょう。